

## 潮の道余話

白井啓治

大洋村の汲上浜では古くから製塩が行なわれていました。しかしその起源はというと、確かな記録もなくはつきりとしたことは分りません。日本文徳実録の元慶三年（879年）の条に「大洗磯前に海水で塩をつくる翁」という記事が出ており、これが現在最古の文献のようです。

大洋村に製塩が最も盛んだった時代は天保年間（1830～1844年）のこと、塩釜が八基あり、土地の人は八釜と言っていたそうです。製塩に従事していたのは比較的小農に属する農家で、汲上・幡木・上沢・大同地区あわせて五六戸であったといえます。

大洋村に作られた塩は吠に詰め、馬の背で汲上から石岡府中に運ばれましたが、この運搬道を「潮の道」と呼ばれていました。

潮の道は、新旧二つのルートがあり、旧ルートは、汲上↓鎌田↓鉾田↓小船津↓両宿↓小貫↓中山↓芹沢↓倉数（中継所）↓与沢↓小川↓高浜↓府中。新ルートは、汲上↓鎌田↓鉾田↓仮宿↓上山↓倉数（中継所）↓与沢↓小川↓四箇村↓府中。

倉数は汲上と府中の往復一日の距離に当たる中間地点で、中継所として塩蔵があり、当時は大層な賑わいを見せていました。往時を偲ばせる糸ひば（樹齢四～五百年）が今も保存されています。

塩蔵の近くには、塩に関係する神社として潮宮神社あり、御神木の杉が大  
地に確りと根を下ろし、時代の移ろいを見守っています。大杉に耳を当てて、  
心澄まして聞くと地中から吸い上げる水の音に重なって、大杉の見てきた潮の  
道にまつわるいろいろな話を語り聞かせてくれます。

これからお話してまいります物語も、大杉が語り聞かせてくれた潮の道の余  
話というか異聞というか、ちよつと切なくなる話です。

駄馬に毎日塩の吠を背負わせ、倉数の潮場に運ぶ年老いた馬子が大杉の根元  
に埋めていった話だそう。

馬子の名は作造。

作造は、流行り病で女房と一人娘をなくし、以来ずーっと一人暮らしであつ  
た。作造には孫のように可愛がっている小作の娘「しず」と、塩造り農家の四  
男で倉数の塩蔵に奉公に出ている「平蔵」という若者がいた。

しずと平蔵は三つ違いで、平蔵は実の妹のようにしずを可愛がっていた。平  
蔵が塩蔵に奉公に出るまでは、作造のところに毎日のように二人でやってきて、  
作造が潮の道で起こった話や潮場で聞いてきたいろいろな噂話をせがむのだつ  
た。

平蔵が十三の歳に、作蔵の口利きで塩蔵に奉公に出たのであつたが、しずは  
毎日のように作造のところに来て平蔵の様子を聞くのだった。平蔵も僅かな駄  
賃を溜めた金で、しずの小物などを買って作造に預けるのだった。

しずが十三歳のとき平蔵は一度だけ爺様が亡くなって里帰りした。そのとき  
平蔵は真っ先にしずに逢ったのだが、すっかり大人びて綺麗になったしずに驚  
かされたのだった。そして、しずの自分に向ける眼差しに、可愛がってくれる  
単なるお兄ちゃんではないもののあることに、たじろぎのような感情を覚えた

のだった。二人の間に、このとき小さからぬ恋の感情が生まれたのだ。それからというものしずはあちこちの塩作り農家に頼まれた子守りの子達を連れ、朝に夕に平藏の様子を聞きに来るのだった。

しずは利発で美人の娘に育っていった。作造は将来二人が一緒になれるといのだが、と願うようになった。同様にしずと平藏も思いを深く募らせていったのだった。

しずは平藏と確かな思いを通わせたいと、子守りを頼まれる大農の隠居婆さんから読み書きの手習いを受け、半ば独学のように読み書きができるようになると、文をせつせと作造に預けるのだった。

平藏は、元々丈夫な性質ではなかったが、読み書き算盤に長け、早くから塩藏では若き番頭にと期待されていた。

しずが十六歳になったときのこと。大洗の大農が寄り合いで集まって来たとき、しずの子供達の面倒をみている様子を目にして、「実に良い娘だ。この娘を是非にも家の嫁に」と思い、村の長に労を願ったのだった。しずの家では願ってもない話で、即断に返事をする、早々に縁談がまとまったのである。勿論、しずの悲しみは計り知れないほど大きなものであった。

しずの家では法外な結納金の納められ、大いに内証の助かったのですが、それはしずとの手切れ金でもあった。しずは、一端村の長の養女となり、長の娘として大洗に嫁いでいくことになったのだ。

しずが村長の養女として入る前日のことであつた。しずは嫁ぐ前にどうしても一度平藏に逢いたいと、作造に頼み込み、密かに塩呷に身を隠し倉敷の潮宮神社に平藏と密会したのだった。

長の養女として入ったしずは、これまでのように作造のところに出かけることができなくなった。

「酸いも苦きもあってこそ若者であり人生。時の消してくれ、また新しい酸いと苦きを知るがこの世」

二人を不憫とは思いつながら作造は達観するのだった。しずから文を預けられることもなく、また平蔵から言葉を聞くこともなかった。

しずがいよいよ嫁入りする日が近づいたある日、しずが作造のところにやってきた。

「最後に一度、平蔵さんに会わなければなりません。作爺にお話することは出来ませんし、文にして平蔵さんに伝えることでもありません。最後のお願いです。もう一度平蔵さんに逢わせて下さい。後生です」

よくよく考えた末、作造は三日後の夜明けに来るように言った。

三日後の夜明けにしずがやってきた。作造は用意した塩の吠にしずを隠すと、塩荷と一緒に馬の背に括り付け、倉数に出かけたのであった。平蔵には明日何かの用を作って昼少し前に潮宮神社の御神木のところに来るように伝えてあった。

しずを潮宮神社の近くに降ろすと、

「潮場さ、荷を下ろして馬っこに餌ば喰わしたら迎えに行く。こんで最後だば確りとさ、別れるだ。ええな。未練すんな」

作造はそう言うど何時ものように塩蔵に荷を下ろし、馬を休ませて潮宮神社に行つたのであった。しかし、そこには二人の姿がなかった。そして、御神木の根元にしずと平蔵が三年間交わした文が束ねられて置いてあった。その上には作造あての文があつたが、作造は見ることもしないで懐に押し込むと、何もなかつた顔で駄馬を引いて汲上に戻つていった。

平蔵と逢つたしずは、一緒に逃げてくれるよう縋つた。大洗に嫁ぐくらいだ

つたら、霞ヶ浦に身を投げて死ぬ、と平蔵に迫ったのだった。

しずには目をつぶって嫁にいけぬ理由があった。三ヶ月前に平蔵と逢って思  
い出を残そうと肉の契りを結んだのであったが、胎に子を宿したのであった。  
平蔵との道行きが叶わぬのなら、本当に霞ヶ浦に身を投げる覚悟でいたのだっ  
た。平蔵には子の身ごもったことは言わなかった。自分を好いてくれているの  
なら理由は要らないと思ったからだ。

平蔵は、昨日作造から潮宮神社に待つようにと知らされたとき、しずと逃げ  
ようと気持ちを固めていた。給金のない奉公の中僅かな駄賃を必死で溜めた全  
てを懐に潮宮神社にやって来たのだった。しずの逃げてくれという言葉は、平  
蔵自身の言葉でもあった。

「知らない土地で二人で暮らそう」

平蔵もしずは断られたら死んで恨みを言っつてやろうと、しずのよこした文を  
懐にしてきたのだった。

二人は、作造への感謝と詫びの気持ちを伝えたいと二つの文束を結び、しず  
が昨夜作造に当てるて書いた手紙を傍らに添え置いて賭け落ちたのであった。

しずと平蔵は、平蔵の知り人を避けるため、竹原方面に道を進めた。もとも  
と丈夫でなかった平蔵は、この三ヶ月間の心痛が重なり、足取りは頼りなかつ  
た。二人はやつとの思いで竹原の郷近くの園部川のほとりについたのは陽も大  
きく斜きかけた頃であった。

激しく咽ぶ平蔵を気遣って、しずは園部川岸に休息をとった。ここ数日来に  
降った雨で水かさの増した園部川は泥にごりの渦を巻いていた。

平蔵の背を撫で摩りながらしずが足元の岸辺を見ると黄色に咲いた河骨の花  
が一面に広がっていた。河骨の黄色が、夕茜をうけると忽ちに紅く染まってい  
った。それを見ているうちにしずはこの先の希望の霞んでいくのを覚えた。

平蔵にはまだ子の身ごもったことは伝えていない。胎の子を産んでも果たして幸せといえるだろうか。貧乏は構わない。辛くもない。でも平蔵さんが病に臥せったりしたら子はどうなるのだろうか。先のことには心痛めることが止まらないのなら、この河骨の花が赤いうちに園部川に身を投げたらどれだけ楽なところか。

しずは何かに曳かれるかのように立ち上がると、渦巻く流れを覗き込んだ。それに気付いた平蔵は、危ないといいながら定まらぬ腰つきで立ち上がりしずの袖を引いた。途端しずの身体はバランスを崩し、流れに向かって傾斜していった。平蔵は必死に助け起そうとしたのだが、体力のない平蔵には支えきれなかった。しずの袖を確りと握ったまま一人は濁流に吞まれてしまったのだった。

翌朝のことである。園部川に鰻の仕掛けを見に来た漁師が女の袖を確りと握った男女の水死体を発見した。男は、塩蔵の平蔵であることは直ぐに知れたが、女は誰かわからなかった。平蔵に、道行きすることの知らなかった者達は、日頃の平蔵の真面目さから、川に落ちそうになった女を救おうと助けを出したが、力足らず一緒に水に吞まれたと噂した。

その噂を耳にした竹原の者たちは、河骨が赤く咲いて、百合姫が女を川に引きずり込んだ。それを男が助けようとしたものだから、巻き添えを喰ったと噂したという。

園部川には女臈ヶ堰と呼ばれる堰があり、竹原城が佐竹軍によって攻め落とされたとき、竹原城主大掾伊勢守義国の娘、百合姫が夜陰にまぎれて曲松に落ち延びようとしたが、追っ手が迫り、もはやこれまでと肌身離さず持っていた黄金の虎の置物を抱いて園部川の淵に見を投じ、十六歳の生涯を閉じたといえます。このとき園部川の岸辺に咲く黄色い河骨の花が、姫の恨みの血で赤く染

まったといわれている。奇しくもしずも十六歳。もしかしたら、竹原の村人が噂するように、百合姫が呼んだのかも知れない。

しずと平蔵が流れ着いて発見されたのは、ちょうど鹿島鉄道の常陸小川駅正面に結ぶ道に架かっている園部大橋あたりであったという。

作造が懐に隠し持って帰ったしずと平蔵の文は、作造がしずの胎の子に我が娘の名であった「はつ」と命名し、隠れ供養を済ませた後、その名を記した一枚の紙を二人の文束に重ね、潮宮神社の御神木の根元に埋めたという。

天保年間の末の頃のことだというから、今からおよそ百六十年前の話だと潮宮神社の大杉が語ってくれた。もっと耳を澄ませて大杉の呟きを聞いたら余話・異聞ではない潮の道を話してくれるに違いない。

おわり